

垂水麓の魅力、魅せられ人に聞く

垂 水島津家は徳川幕府が安定するのを見計らったように、慶長16（1611）年に山城の垂水城から現在の垂水小学校の地に移転しました。本城川が作り出した沖積平野は葦や木々が繁茂していたので新しいお飯屋は別名『林之城』とも呼称されました。計画的に作られた麓は、通りが縦横に整然と区画されて、他の麓と違っています。幕藩体制が崩壊し、明治政府が確立し県内の麓の位置づけは大きく変わりますが、それまで、垂水麓はお飯屋を中心に武士階級が居住する政治、文化の中心であり垂水郷の権威として、武家文化の中心でありました。一方、本町地区は道の両側に商店が櫛比する垂水の経済の中心をなしていました。

と現在の町割りほとんど変わらないことがわかります。出水などの武家屋敷は残っていませんが垂水麓には武家門が点在して残っています。家臣団の屋敷の広大さ、小さなクランクやゆるやかに曲がった小道まで変わっていないことを発見する喜びがあります。また、西側を貫いて走るブリック道路はかつて物流の動脈を

目指した国鉄大隅線の廃線路があり、もう少し西へ足を延ばせば、老舗の『十五郎そば』、第六垂水丸の慰霊碑が建つ垂水旧港があります。昔と今が混在する垂水麓を歩いて、実感、体感してほしいのです。

▲川崎あさ子氏
日本遺産地域プロデューサー



▲瀬角 龍平氏
市文化財保護審議委員会会長



▲瀬角 龍平氏
市文化財保護審議委員会会長

薩 摩藩に120力所あった武士の住まいである麓は、他藩のような巨大な城は無く、「島津家は人をもって城となす」の言葉通り、多くの武士を各地に配置し、いざというときの守りに備えました。垂水麓はかつて、「一垂、二蒲生、三知覧」と云われた程、武家屋敷の風情が残っていたとされます。戦後の急激な近代化により古い建物は壊され、昔の面影は無くなってしまいましたがお長屋、垂水人形などの史跡や文化財が今もなお残っています。また、旧家からは、古文書や掛け軸などが発見されることがあります。鹿児島島の島津本家に次ぐ家格であったとも云われる垂水島津家は、江戸中期から明治にかけて文化教育に力を入れておりました。特に第10代・貴澄公たかすみのときには、優秀な講

師を招き、漢詩や和歌など多くの文化が開かれました。当時の歌集も現存しており、近世文学史を研究する上で貴重な資料となっています。私は、それらのものから、当時の人々の生活や交流などを理解し、垂水に来てくださる観光客の皆さまに紹介していきたいです。文化財インストラクター講習で、講師が言われた「本やインターネットには載っていない歴史や逸話、そこしか味わうことができない空気やガイドの思いを伝えてほしい」という言葉を大切に、観光客の皆さんと向き合っていきたいと思えます。

後世に語り継ぎたい文化



垂水麓には、有形・無形多くの文化財が残っています。400年以上前に垂水・薩摩を守った武士たちが住んでいた街に残る、貴重な文化です。先人たちが残してくれた文化を後世に引き継いでいきましょう。垂水麓に関する詳しい情報は、社会教育課までお問い合わせください。

垂水人形

江戸時代には、武士の内職として作られていたと言われている垂水人形。粘土を型枠に入れて乾燥させた後に素焼きし、胡粉（顔料）を塗り、色付けされる素朴な人形です。昭和30年代に一度制作が途絶えてしまいましたが、平成元年に、「垂水人形研究会」が結成され、再び土人形の制作が開始されました。現在でも、垂水土人形展など、後世に継ぐ取り組みが行われています。



武家門

垂水麓には、武家屋敷は残されていませんが、武家門が多く残されています。



▲垂水麓に点在する武家門

馬場

乗馬を行うための場所のことで、各麓に馬場があり、そこに暮らす武士が乗馬訓練などを行っていました。現在も通りの名称が残っており、馬場が当時の道幅で生活道路として機能しています。

無形の文化

▼ 麓言葉

「きこんにしゃんせ」（無理せずにつくりしてください）
「まかいもんそ」（一緒にしましょう）など垂水の麓言葉は、他所とは異なる優雅で丁寧な言葉遣いで、最近まで話されていました。

▼ 郷土料理

「粟んかゆ」や新城・柘原の「二十三夜まっちゃげだご」水之上の「本城めんざん」海瀧・中俣の「とんきゅん汁大根そば」牛根の「のいのまかね」など、外食などなかった時代に季節の野菜、魚などを使って、行事や祭りの際、ごちそうとしてふるまわれた愛情溢れるもので、素朴でありながら垂水の歴史と深く関わってきたふるさとの味です。



▲粟んかゆ